

センパー・イデム―不変の男^一

"Semper Idem" (When God Laughs and Other Stories)

翻訳・川村真央

ビックネル医師は、すこぶる機嫌がよかった。ちよつとしたアクシデント、ほんの少しの不注意で、それだけのことで、助かるだろうと思われた男が前の晩に死んだのだ。単なる船乗り、無数にいる不潔な連中の一人にすぎなかったとはいえ、救急病院のスチュワード^二は、午前中ずつと不安げに仕事をしていた。男が死んだのを気に病んでいたわけではない。ビックネル医師がそんなことを気にしないのは、いやというほど知っていた。むしろ悩みの種は、手術が非常にうまくいったということの方だった。最も難しい手術の一つだったが、うまくいったばかりでなく、実に手際よく、大胆にやつてのけられた。あとは術後治療の、つまり看護師やスチュワード次第だったのだ。だが、男は死んでしまった。大したことではなく、ちよつとした不注意だった。しかし、これは医師であるビックネルの逆鱗に触れるには全くもって十分であり、向こう二十四時間、スタッフや看護師たちをかなり動揺させた。

しかし、すでに述べたように、ビックネル医師は、すこぶる機嫌がよかった。恐れおののくスチュワードが、男の死という予期せぬ知らせをもたらした時にも、非難の言葉を一言だつて発することはなかった。唇をすぼめて、ラグタイム^三の一節を軽く口ずさんでいたと思つたら、急に、一番上の子共は元氣か、と愛想良く尋ねた。スチュワードは事の次第が伝わらなかつたのではないかと思つて、もう一度繰り返した。

「ああ、うん。」ビックネル医師は、じれつたそうに言った。「わかってるよ。だが、センパー・イデムはどうなんだ？退院の準備はできてるのか？」

「はい。今、着替えを手伝ってもらっていますよ。」仕事の一段落を前に、ヨードチンキのにおいが充満したこの部屋の中が、未だ平穩であることにほつとして、スチュワードは答えた。

ビックネル医師にとって、船乗りの死を十分に埋め合わせてくれたのは、センパー・イデムの回復だった。死など大したことではなく、気持ちの良いものというわけではないが職業柄避けては通れないものであつて、症例が、そう、症例が全てだとも言ふようであつた。彼のことを知る者は、むやみに人を殺すやつだと決めつけがちだったが、同業者たちはみな、この男ほど大胆で腕のいい外科医は他にいないと信じていた。もっとも、想像力に富んだ男というわけではなかつた。感情豊かでもなく、したがつて他人の感情を受け入れる度量もなかつた。まめで几帳面、そして合理的な性格だった。この男にとつては、人間なんて個性や個人的価値を持たないチェスの駒にすぎないかのようなやつだ。だが、症例となると話は別だった。ひどい傷であればあるほど、命が危うければ危ういほど、ビックネル医師の目には重要な患者であるように見えた。ありきたりの傷しかなければ、桂冠詩人であつても、名もなき手負いのこじき同然に見捨ててしまふだろ

^一 原題 "Semper Idem" はラテン語で「常に同じである」という意味

^二 術後の患者に対して、指示やマニュアルの通りに投薬等の治療を行うスタッフのこと

^三 音楽ジャンルの一種

う。死を拒むなど、生命の法則に逆らうようなものだと言って。まるでサーカスがやってきたら、パンチとジュディの操り人形劇^四なんか、見向きもしなくなる子供みたいなものだ。

センパー・イデムの場合もそうだった。ビックネルの興味を引いたのは、この男の謎でも、男が言葉を発しないことでもなかった。謎だらけのロマンス―俗受け狙いの記者が日曜刊行の新聞数紙の紙面を騒がせたものだ―これでもなかった。センパー・イデムの喉は切られていたのだ。これが肝心だった。ここが彼の関心の的だったのだ。耳から耳まで切れており、外科医が千人いたって、回復の見込みを一人も見出せないような状態だった。しかし、救急隊員の迅速な対応と、ビックネル医師のおかげで、この世を立ち去ろうとしていたこの男は、もう一度この世に引き戻されてしまったのだ。病院で働く他の者たちは、この患者が運び込まれてきた時、無理だ、と首を横に振った。喉、気管、頸動脈、ほとんどが切断されていて、失血もはなはだしい。結果はわかりきっているはずだったが、ビックネル医師は手際よく、同業者でさえもぞっとするような処置を施した。そしてなんと！男は回復したのだ。

だから、センパー・イデムが元気になって退院するというこの日、スチュワードからの知らせで、ビックネル医師の上機嫌が損なわれることはなく、意気揚々と電車の車輪に巻き込まれてめちゃくちゃになった子供の体の処置に取り掛かった。

多くの人の記憶に残ることになるほど、センパー・イデムの症例は、不謹慎ながらもつともでもあるが、かなりの好奇心を掻き立てた。彼はスラム街の家で、既述のとおり、首を切った状態で発見された。血が階下の部屋にまで滴り落ち、そこで行われていたどんちゃん騒ぎの邪魔をしたのだ。この男は明らかに立ったまま、やってのけたのだ。テーブルの上の燭台に立てかけた写真を最期まで見つめんがため、頭を前に倒して。この体勢のおかげでビックネル医師は彼を救うことが出来た。きちんとやり遂げるには、頭を後ろに倒すべきだったが、そうしていたら、カミソリで切った傷口はぞっとするものになっていただろう。首が引きのばされ、血管が膨張して、きつと首がほとんど切れてしまっていたはずだ。

病院で、死の淵からの険しい道のりを戻ってくる間中ずっと、男の口からは一言も発されることはなかった。捜査官たちにも、この男のことは何一つわからなかった。誰もが、彼のことを知らないばかりか、見たことも聞いたこともなかったのだ。こんな人物は他に類を見なかった。衣服や身の回りのものは最下層労働者のものだったが、手は紳士の手だった。だが、文字を書いたもの―過去の来歴や社会的地位を示してくれるはずのもの―は、いっさい見つからなかった。たった一つを除いては、何も。

たった一つのものというのは、その写真のことだった。もし見たままを写し取っているとしたら、写真立ての中からこちらを見つめている女性は、実に魅力的だったに違いない。この写真は素人が撮ったものだった。というのは、プロの写真家やフォトスタジオのサインが見つからなかったからだ。写真立ての片隅には、優美で女性的な飾り文字で「センパー・イデム、センパー・イデリス」^五と書いてあった。そして、その言葉にふさわしいような女性だった。今も多くの人

^四 夫パンチと妻ジュディの物語を描いた滑稽な操り人形劇。

^五 ラテン語で「常に変わらざあれ、常に忠実であれ」の意。

に記憶に焼き付いているように、一度見たら決して忘れられない顔だった。当時、主要な新聞が、うまい具合にハーフトーン^六にして、その写真そっくりの似顔絵を掲載したが、そんなことをしても男の身元は判明せず、むやみに大衆の好奇心を掻き立て、売文記者が似たような記事をきりがないほど書き散らしただけに終わった。

他にいい名前もなかったので、この自殺未遂は病院勤務者の間で、そして世間で、センパー・イデムとして知られることとなった。そして、センパー・イデムは相変わらずの状態だった。記者も、捜査官も、看護師たちも、どうしようもないとあきらめた。どうしても、一言だって彼の口から引き出すことが出来なかったのである。しかし、きよろきよろと瞳を動かす様子から、耳は聞こえており、また尋ねられる質問を頭では全て理解していることを示していた。

ビックネル医師は患者と退院の挨拶を交わしに、診察室に立ち寄ったが、謎だらけの、小説のような話にも、興味を引かれることはなかった。医師は、この患者の治療にあたって偉業を成し遂げた。事実上、先例のない手術をやつてのけたのだ。この男がどこの誰で、何者であるかなんてどうでもよかつたし、この先二度と会うこともないだろう。ただ、芸術家が完成した自分の作品をじっと眺めるように、自分の手と頭がやり遂げた作品を最後に見たいと思っただけなのだ。

センパー・イデムは未だ何も発さずにいた。早く立ち去りたいと思っただけだった。ビックネル医師も彼から一言も引き出すことはできなかったもの、そんなことはどうでもよかつた。彼は患者の喉を丹念に診察した。名残惜しそうに、また親が子を慈しむように、ぞつとするようなその傷に時間をかけた。傷は、見て気持ちの良い代物ではなかつた。赤く、熱を持って炎症を起こした傷は、耳の下からもう片方の耳の下まで走っていて――どこからどう見ても、この男がたつた今首つりの縄から救い出されたように見えるのだが――首筋のところで終わっていた。

どこまでも声を発することなく、鎖につながれたライオンのような様子で診察されながら、センパー・イデムは公衆の目から逃れたいという願望のみを示すのだった。

「さあ、もう行っていいぞ。」ビックネル医師は、男の肩に手をかけ、自分の作品を最後にひと目盗み見ながら、とうとう言った。「だが、一つアドバイスさせてほしい。次にやらかす時は、顎を上げておくんた。顎を下げて牛みたいに自殺するんじゃないぞ。手際よく上手にやるんだ。わかるな、手際よく、上手に。」

センパー・イデムの瞳は、聞こえたしるしに瞬き、次の瞬間にはもう、閉まる病院のドアを背にしていた。

その日、ビックネル医師は忙しく、手術台を離れようとタバコに火をつけた時には、午後も随分遅くなっていた。その日は運ばれてくる患者がほとんど絶えなかつたのだ。ところが、一つ目の煙の輪が医師の頭のあたりを漂っていた時、開け放した窓から救急車のサイレンが聞こえ、続いてぞつとするような患者をのせたストレッチャーが運び込まれてきた。

六 絵画・写真などにおける明と暗の中間の調子のこと。

「手術台の上に置くんだ。」とビッケネル医師は指示を出し、安全な場所にタバコを置くように瞬目を離した。「どうしたんだ？」

「自殺です、喉を切って。」救急隊員の一人が答えた。「モーガン通りで。望みはほとんどないと思います、先生。ほとんど死にかけています。」

「どれ、ともかく診てみようじゃないか。」と医師が覗き込んだその時、最後にかすかに身じろぎをして、患者は動かなくなつた。

「センパー・イデムが戻ってきた。」スチュワードが言った。

「ああ。」ビッケネル医師はこう答えた。「そしてまた去っていった。今度はへまをやらなかつたな。うまくやったのさ、驚いたな。うまくやってのけた。アドバイスをちゃんと聞いてたんだ。もう私のやることはない。霊安室へ運ぶんだ。」

ビッケネル医師は置いておいたタバコを取って、もう一度火をつけ、煙を吐き出す合間にスチュワードを見ながらこう言うのだった。「昨夜は君が死なせたが、これでおあいこだな。これで、貸し借りなしだ。」